

+ 5 5 【だんだん】

母親の体調が悪いので、ぼくが代わりに村役場に行きました。

一彦さん（このひとは正彦さんの兄です）はいるかときくと、仕事で山本不二子さんのところに行っているというので、ぼくは引き返して、山本不二子さん（つまり隣のお姉さん）の家に行きました。

「かずひこさんは、いるかのう」

玄関で大声をだすと、しばらくしてお姉さんがでてきました。

「金ちゃんなのね」

お姉さんの姿は、ちょっと正視できないものでした。

髪は乱れ顔は痣（あざ）だらけ、衣服も元の形をなしてはいませんでした。

ぼくはわけをきく前に、

「かずひこさんは、いるかのう」

とききました。

「いるにはいますが、あまり具合がよくありません」

お姉さんも具合がわるそうです。

「かずひこさんは、びょうきかい」

「いえ、わたしがいま、包丁で刺したばかりだから」

「ころしちゃったのかい」

「そのつもりはなかったの」

「しんじやったのかのう」

「いえ、いまはただじっとすわりこんでいるだけ」

「だば、いきてるんじゃな」

「ええ、まだ生きてます。裏の納屋のなかで」

「どうして、なやなんじゃ」

「納屋まで這って行って、座り込んでいます。荒い息で」

「いしゃは、よんだのかのう」

「いいえ。医者も警察も呼ばないでほしいって」

こどもながらに、なんとなく理解しました。

「かずひこさんが、そういうたのか。かずひこさんは、おねさんに、らんぼうをしたんじゃな」

「ええ、たのんでもおねがいしても、無理矢理（むりやり）」

「かずひこさんに、あってもええかのう」

「どうぞ」

お姉さんに案内されて納屋に行きました。

一彦さんはぼくの顔を見るなり、

「金ちゃん、面目（めんぼく）ありません」

とぎれとぎれにいて、泣きました。

腹から血が溢れ出ていて、一彦さんの顔は真っ白でした。

「かずひこさん、しっかりせいや」

「家内にも子供にも、面目ありません」

またとぎれとぎれにいて、泣きました。

「かずひこさん、しにそうじゃのう」

「僕はもうすぐ死にますが、金ちゃん、最後ののぞみが三つあります」

「みつつとは、おおいのう」

「不二子さんに、どうか、許して、もらいたいのです」

「そらあ、わしからよくたのんでおく」

「警察はもちろん、家族にも、しられないように、してほしいのです」

「むずかしいが、なんとかするわい」

「僕の死体を、だれにもみつからないよう、消滅（しょうめつ）、させてくれませんか」

ぼくが頼まれたら断れない性格なのを、たぶん知っているんだ。

「しょうめつかい。なんぎじゃのう」

「虫のいい、はなしですが、虫の息の、僕にめんじて、よろしく、おねがいします」

一彦さんは掌を合わせ、そのまま息絶えた。

「しんだのう」

お姉さんをふりかえると、お姉さんも泣いている。

「わたしが、ころしたのです」

「そうともいえんのう」

ぼくがいうと、お姉さんはぼくを見て、

「どういうこと」

「かずひこさんは、じぶんでじぶんを、ころしたんじゃ。わしはそうお

もうとる」

いいながらぼくは、正彦さんの死体を、納屋にあった筵（むしろ）で包んで麻縄でしばりました。

暗くなってから、お姉さんと一緒に、荷車で底なし沼まで運び、死体を沈めました。

「これでええ。かずひこさんの、のぞみじゃからのう」

そのとき、強風でもないのに、荷車が音をたてて横転しました。

だんだん、という音をたてて。

「おねえさん、ええかのう。かずひこさんは、おそろしいおぼけの、【だんだん】にくわれたんじゃ。わしだけがそのぼめんを、もくげきしたんじゃ。わかったかのう」

お姉さんが黙っているので、ぼくは何度も何度も、

「ええかのう、わかったかのう」

と強くいいました。

ようやく、

「金ちゃん、ありがとう」

お姉さんはうなずきました。

翌朝、村長さんの家と、村役場に行って、ぼくはおそろべき【だんだん】の話をしました。

信じたのか信じなかったのか、それはわかりませんが、一彦さんが村からいなくなったことは認めました。

村役場のお金を横領していたので、遠くまで逃げたのか、それとも神隠しにあったのか。

どちらにしろ、前から家族とは絶縁状態になっていたらしく、家族も捜索願いもださないし、嘆き悲しんだりもしていない。

そういう噂はたちましたが、だれも【だんだん】のことは、ちっともいいませんでした。

懐爺には真実を話しました。

懐爺は黙ってきいていて、なにもいいませんでした。